

座談会

総合型地域スポーツクラブへの 障がい者スポーツの導入 Part.1

平成26年度、公益財団法人日本レクリエーション協会が、文部科学省からの委託を受け、「地域のスポーツクラブにおける障がい者スポーツの導入」事業を実施しました。この事業は、総合型クラブで障がい者の方々を受け入れ、スポーツ教室を開催し、クラブが自ら障がい者を受け入れることができるよう、ノウハウを身に付けていただくモデル事業でした。そして、この事業をまとめたガイドブックが発行されたことを受け、これらの情報を広く発信するため、障がい者スポーツに携わる皆さんにお集まりいただきお話を伺いました。

1

総合型地域スポーツクラブの理念。 これまでの取り組み



| 対談者 |

松尾哲矢氏

立教大学コミュニティ 福祉学部教授

「地域のスポーツクラブにおける障がい者
スポーツの導入」事業協力者会議座長

大日方邦子氏

パラリンピック金メダリスト(アルペンスキー)

電通パブリックリレーションズ コンサルタント

増田康太氏

NPO法人クラブしっくーず

クラブマネジャー

戸沼智貴氏

NPO法人高津総合型スポーツクラブSELF
企画・広報担当

菊地 正氏

NPO法人高津総合型スポーツクラブSELF
副理事長

総合型地域スポーツクラブ
公式メールマガジン 編集長

【写真後列(左から)菊地正氏、増田康太氏、戸沼
智貴氏 【前列(左から)松尾哲矢氏、大日方邦子氏

地域との接点を持つ
それが一つのキーワード

松尾 敬称略 最初に総合型地域スポーツクラブの基本的な考え方と、これまで障がい者スポーツに対してどんな取り組みをしてきたのかについてお話しください。

戸沼 「SELF」が障がい者スポーツと銘打ってやり始めたのは2〜3年前です。きっかけは県立養護学校の先生との出会いでした。その時に障がい者の方の卒業後の人生についてお聞きしたのですが、肥満、活動の場がない、地域との接点がないなどいろいろ課題がありました。

受け入れのためのノウハウもなかったので、2年ほどかけて体制を整えました。最初は障がい者スポーツについてある程度知識のある方に、素晴らしいプログラムをやっていたきました。しかし、それを継続するとなると、講師の方の謝金など問題が出てきました。そこで、地域の人ができるプログラムはないかと考え、それが「SELFハートクラブ」という形で始まりました。最初はトイレや導線はどうしようと思ったのですが、それもみんな受けて入れてやっていくことになりました。場所に関しては近くの養護学校に相談し

総合型地域スポーツクラブへの障がい者スポーツの導入

1 | 総合型地域スポーツクラブの理念。これまでの取り組み

菊地 障がい者の方は、家庭と学校など、ある意味守られた世界にいるため、養護学校からの「ぜひ地域で受け入れてほしい」というのは、かなりキーンワードだと思いますね。参加できる当事者の喜びとご家族の喜びは想像を絶するほど大きいもので、外へ出ると我々の何十倍も笑顔と元気さを見えています。うちは毎週土曜日に行っているのですが、皆さん絶対に休まないで来てくれます。



松尾哲矢

戸沼 県立養護学校の地域ネットワーク推進会議というのが神奈川県にはあるんですけど、その中に入って我々はやっています。例えば、養護学校の卒業式に我々も来賓として出席し紹介してもらったことによって、保護者の方々にも地域にそういう場があるということとを伝えることができています。我々は運良く自然の流れでそうになりました。



増田康太

増田 「しっきーず」は市内の小学校のボランティアルームに事務局を置き、誰でも参加できる開かれたクラブを目指して発足しました。ちなみにその時、僕は小学4年生、平成11年頃のことです。当時のプログラム部長が自分の母(現理事長)でした。そのボランティアルームで障がいのある子どもたちや、小中学校に通っている子どもたちが交流しているうちに、いろいろなニーズが出てきたんです。例えば、特別支援学校に通っている障がいのあるお嬢さんの、「泳ぎた

いので、一緒に泳いでください」という小さな一声から始まったと思います。そうすると、そのお母さんも含めた地域の方々がボランティアとして、機織りや折り紙などいろいろなることを普通学級の小学生に教えたりと、ぐるぐる回っていったんですね。そして、5年、10年と過ぎてその子たちが社会に出て行き、務めた先の事業所などで仕事をしていると、さらにニーズが増えるわけです。彼ら、彼女たちが20歳、30歳と年齢を重ねていった時に、事業所の所長さんから「肥満が深刻だ」といった話も出てきました。そんな時に地域にスポーツやレクリエーションをコミュニケーションツールとして活動しているクラブはないものかという話から、しっきーずがあるじゃないかとあって、10年くらい経ちました。ボランティアの中には、自分の健康づくりのために太極拳を楽しんでいる人も多く、それこそ障がいのある方が



戸沼智貴

飛び跳ねたりした時にどうしたらいいのか分からないということがありました。しかし、60代、70代、80代のシニアの方になってくると子育てが終わり、今は孫の子育て中だから、何となく通じる瞬間が出てくるわけです。その瞬間に障がい者として見えている半面、少しずつ肩の力が抜けてきて、さりげなく接することができるようになります。でも、反省することもあって、それを事業所の職員さんとミーティングを繰り返して、1か月ごとに積み重ねていった結果、今は皆さん何となく「○○ちゃんはどういうふうにするとうなるから、じゃあこういうふうにしてみようかしら」という、そんなシニアさんが生まれてきています。

CLUB for ALL
地域スポーツクラブへの
障がい者スポーツ導入
(ガイドブック)

全国に約3,500ある総合型地域スポーツクラブの中から、地域性や障がい者スポーツへの取り組み実績の有無を勘案して9クラブをモデルクラブに選定。本冊子は、今回の事業活動を通じて浮かび上がってきた実践のためのヒントや課題などを総合型クラブ向けのガイドブックにまとめたものです。

2 障がい者スポーツを巡る課題。 日常的な活動を巡って



障がい者と見るのではなく
人として見るのが大切

菊地 たまたまSELFの周りには、市立の中央支援学校、中学校が2つ、小学校が3つと県立の養護学校があります。そして、地域で6校連のネットワークを組んでいます。ですから、中央支援学校は、小中学校のPTAさんを中心にフェスティバルや、いろいろな活動ができるステージが作られています。

大日方 支援学校のお子さんは多いのですか？

戸沼 今、うちは10〜15人くらいが会員となっています。我々の方針として、多くの人を受け入れないというわけではないのですが、一つの団体で大人数となるといろいろな面で大変になってきます。しかし、10人くらいを2〜3人で見えるならできます。そういうのを増やしていければと考えています。

大日方 特別支援学校ですとかなり遠い所からも通われるので、どうしても家から目的地である学校に行き帰ってきてという生活になってしま

います。そして、そこでの生活が終わると突然居場所を失ってしまいます。ですから、スポーツを通じて地域のつながりを作るのはすごく重要だと思います。

また、お話をお聞きして逆に人数が少ないのはいいことだと思っただけで完結させられると、ある種の閉塞感だったり、新しい刺激が入りづらい傾向があります。そういう中で障がいがあるなしにかかわらず地域の人と連携するには、少人数の方がうまくつながるのではと思います。

松尾 自宅と学校との距離が遠いこともあって、学校周辺の地域だけでなく、自宅周辺の地域での活動が重要になってくるんですね。

大日方 学校のそばや自宅の周辺に、



菊地 正



大日方邦子

受け入れてもらえるネットワークがあればいいですね。

ただ、なかなか周りとうまく接していいのかわからないというのがありますね。そのことがいけないというのではなく、私も知的障がいのあるお子さんと一緒にスキーをすることがよくありますが、そのお子さんが突然思わぬ行動をとって、その理由が分からない時があるんですね。その時に分からないことを押し殺してしまうより、分からないのが当たり前だから、分からないことは周りの人にどんどん聞けばいいし、もしかしたら本人に聞いた方がいい時もあるんですね。

それもちよっとしたコツというか、コミュニケーションなんです。それは接するから分かることで、私も最初は聞けませんでした。でも、直接聞いた方が早いと思って聞いてみたら、その場合は教えてくれました。接する回数が増えれば、見えてくるこ

ともあるんですね。

戸沼 正にその通りです。子育ても同じだろうし、我々が総合型クラブで子どもたちを見ているのも同じことです。障がい者となると、障がいしか見ないで、その人自身を見ない。そこが問題ですね。

松尾 この話はすごく深いと思います。江戸時代から「福子の思想」という、障がいのある子どもさんが生まれてくると幸せになるといふ言い伝えがあります。なぜかというところ、その人を中心にしてみんなが力を合わせて何とかしていかうとするから、その家は豊かになるというのです。その福子の人がいれば、みんなが守るわけです。ところが明治以降学校制度ができて、一人の先生が多くの子どもたちを面倒見なければならなくなつた時に、特別な支援が必要な、違う行動をとる子と一緒になかなか難しくなつたわけです。そこで、その子たちを集めて学級を作るか、あるいは学校を作るかとなつたのですね。ある意味、分からないことを分らないまま過ごさせてきたのは、実を言うと学校制度や近代社会が作ってきたものなのです。逆に言うとそ

れをもう一回戻すというんですかね、あるべき姿に戻していくプロセスがものすごく求められるのだろうと思います。それが今、大日方さんもおっしゃっているように最初の声掛けをどうすればいいのかということにつながってくるわけです。

菊地 うちのクラブの子どもたちは一緒に卓球をやったり、ダンスをやったりしますが、まったく問題なくやります。

大日方 1対1の子ども同士だと偏見がないんですね。

戸沼 大人はどうしても障がいのある子どもを見ると、良くも悪くも何かしてあげようと思うのです。でも、それは余計なお世話で、子ども同士であればお互いにできるところを見て、「お前すごいな」となります。

松尾 学校制度の話ではないですけど、健常の子どもと障がいのある子どもが一緒に何かするということがないですね。

大日方 少ないですよ。私も文科省の方といういろいろお話することが多い

のですが、特別学級、特別支援校という形が教育としてはある方が、いわゆる教育の質という意味においてはいいんです。しかし一方で、特別視し過ぎるのはいけないのだとも思っていますね。普通の学校の中に特別支援学級が併設されている所を私も見学させていただきましたが、登下校時に接触があったりすると危ないから学校の玄関を別々に分けています。それを聞いた時に、正直、そこまで分けてもいいのではないかと思います。

それこそ地域に出れば当たり前なので、さっきのお話じゃないですけど、一人の人として見ることができかどうかと考えた時に、この人は特別支援学級で入口も出口も別の所で、でも、同じ学校なんですと言われても多分あまり接点は感じにくいですよ。ある種、大人の配慮、大人の考え方だと思つたんです。子どもと一緒に生活していれば人として、お友達として見ると思っています。それができるのが教育だと思います。授業の力リキュラムの中で、算数や国語などの授業を仮に別にした方がいいと思つても、つながれるのはスポーツだと思つています。一緒に体を動かして、接点を作ることがすごく大切ですよ。

総合型地域スポーツクラブへの障がい者スポーツの導入

3 | 文部科学省委託事業「地域のスポーツクラブにおける障がい者スポーツの導入」事業の具体的な取り組みと成果と課題



松尾 2020年にパラリンピックが日本にやってきました。僕たちもそれを支えようと思っていますが、これまで専門家が自負を持ってやってこられたわけですから、簡単に言うなという思いは随分あると思います。ましてや最初から制度化されたり、マニュアル化されていたわけではないわけで、ものすごく苦労があった中でのことですからね。これからパラリンピックを迎えるに当たって障がい者スポーツをどんどん広げていこうとする時に、まずは専門家の意見を聞く姿勢が大事だよと

というのが一つありますね。

大日方 「専門家と一緒にやっていきたいんです」ということを言い続けることですよ。

松尾 そういった意味では今回、この事業が大事だったと思うのは、日本レクリエーション協会、日本障がい者スポーツ協会と日本体育協会が一緒にあって、日本体育協会で総合型地域スポーツクラブを選んでいただき、日本障がい者スポーツ協会から指導者の方を派遣しましょう、全体の運営は日本レクリエーション協会で行いましょうという仕組みを取ったことです。各団体がそれぞれの専門性を生かし、協力して事業を展開する仕組みづくりとつながりづくりが大切ですね。

戸沼 こちらとしても新たに「なるほど」と思っことも教えていただければ、専門でやっている方にも地域で考えてやっていることを分かっていたただける。相互理解ができます。

増田 今回の事業は金曜日の夜7時半から9時半ぐらいまでの2時間行いました。いつもは小学校の体育館で、自分たちでバスケットボールやスポン

ジボールを使ったサッカーを、障がいのある方も一緒に参加して何となくやっているんです。

ところが、今回、指導者の方に来ていただいた時にサポータースタッフの若者たちが、自分たちはどの立ち位置でやればいいんだというのが分からなくなってしまうんです。今まで、しつきーずに参加したことなかった障害のある方にも新たに声掛けをしたことにより、いつも来ていた人数より数が増えたんですよ。そうなった時に顔見知りには声を掛けられても、新たな参加者には声を掛けづらいこともあり、若者たちが端の方でバスケットをしていたりする。そうすると指導者の方も「あの若者は…」となって、お互いあまりいい感情を持たない状況になってしまいました。

そこで、第3回目が始まる前に指導者の方々にクラブハウスに来ていただいて、僕と理事長から「スポーツの競技向上を目指しているのではなく、障がいのある方たち、若者たち、見に来ている障がい者のお父さんお母さん、その人たち全体で会話したりくつろいでいる、そういうたまり場を作っていくのがクラブの理念としてはあるんです」と1時間ぐらいかけて伝えたいんです。そして、「今回来ているスタッフの



若者たちも障がい者スポーツ指導員になりたくて入ったわけではなく、昔遊んだ小学校で遊びながら障がい者をサポートしているんです。そこは温かく見守ってください」と話をしたら、理解していただき、それからうまくいきました。

松尾 指導者の方もあるイメージを持ってお見えになりますからね。

増田 ミーティングをやって本当に良かったと思います。

※座談会の続きは次号で掲載します。